23

俳諧文庫 二十八

東武 青山百韻

俳 九十二

へ 5
1139
23

門 へ5
号 1139
巻 23

宗教研究室

序

我ふるき法華集の会あれども他国の仏身
をしらくふいやほうあるらう今年ハくとおもれ
て又まことよ言ちんうに我よおかくもをもふ小
かくてをいりをおもをもとをもをもき小今
より一百年を過くして法国う年出の仏

後を辞退して活変小変今の世態を見て
まのあたり無勢を待ちんとすると作者ハ
御の生会を会せんとせし世日の庶流小さご史作
物語をそ小言の喫の云無りしを見て
遠近の遠中へ白ちく一代の百韻とか羊蹄の
白牡小加へん又は時の変化をやせ
を作小幕恵の深前をも見て古人の
へくの庶流をも作て百日の海尾作

なのまて初こ物語作をそう言ハ
御の名吟味も御おかりの御ちの弱ハ
活してはさ言ちを新作る

松泉舎
文鳥

明和二戊午仲月

百韻

雲武坊

ちる山ぢ世ゆかぬ春おの月と雪
辛ゝ如ゝ小屋乃紅　文雪
旅ひ人ゝと二階小高ゆゝて　歌吉
膳のもるのを祝ゝて　椎有
ひゝ宴へ出ゝて来れ屋ゝ雪　周ゝ
川ゝゆゝ春ゝ知れゝ　雪言

蟬のこゑ聞くとなしに寂かなり　　於川

つゆのかをりけて雲を引く雲　　武月

ウ

佐渡へ乗れ合ふ家ぬりかなり　　素柯

植まとをき柳沼の霧屋　　東子

高く〳〵八徳と面の初たらん　　芳角

湖市さく見れや雲を見れば　　冬市

清き水面さう気句も松りれを　　菜笠

きちきち写小青のうりき　　柳女

きく沼小廻向の鈴の鳴るかな　　梅屋

きくれる連の橋小ぶまぬき　　雨白

弱ふ面ふ見れて人乃春ふまて　　春雀

又うてあんふ月も見れば　　小巴

去のまるも居あうほと佳るかと　　洗耳

雨ん赤ふれも玉川乃枝　　蛙青

世界さ花ふみれ見れば　　桂花

菱入の年おまる去ぬを　　肆筵

涼解のえかうの石へ郭戸を和市　釈　汕路

あれ〳〵さるうのさらすと　仝　鶴里

江掃ふさへく市場の立おさり　野夕

剪るとくらひらるて小さうる　文枝

怖ん義ろさ家屋のえんうと　さよ

子郭の鍋芦ふかく御殿の香　雪雨

世世かく光ろうかさるも是沈牛　蔡法

とを一えれを家有て沈上　一垂

時雨もおりかてあれとをりと　サ　松糸

年を春ふこるる笠新　松夫

えを紅ろもてこるうとうらく　雨葉

年の月ろを立ん御饗　樹柳

ゆかうえかふ手中の月も那武ろ　雲車

かんとあつて資産の結宮　又言

ろかも文屋根のさうきの埋ふと　佳景

寺ろうを弥沈も石今　竹尾

ひとこと云うて髪小細工をかく　時幸

仕事の中に針ばかり　梅吟

入れの明るうるおいそうて　玄仙

明けて涼る五月雨の庭　波道

片隅をとりて故屋の物ばかり　祇尹

聲の新しき医者に感心　多葉

明るくなる。降る雨を窓を通る　湖仝

つゆと溝のあふれふる雨　桃之

物を動かすまく三日四日は勝義　金春

追ふてひかれて高る雑子格　出雨

明るほどの花をつるかれ格て　与一

本屋の江も高花　穀藉　香哉

雨をかぶる動かぬ社殿をかく　文治

風をもつかれて朝の人情　白生

器をつぶ入れの湖る川むこう　笑二

掃てやうこんかのさしも　雨水

五領
岳
奥
凡
和
柳
里松
赤城

如夫 喧嘩のうたる 桐左

生皮の 薄かるべく 鼠口

ふらけの 薄ものとうく 清ものう

ゆうて おうたるは 神と思ひ

れいの 怪の凡うるく

ぬるけて 始めて

清きとの 清をかく 二枚打

ぬるけて 清ものう

ぬるけて 清ものう

五月雨さし 山中

ゆうう 雨うるる 柳絮

三ウ 雨うて 汗ものうく

市桃

あるを 泥かくて 村角

其逆

立かりう 雪清 切羽 幕の定

冬角

日雇も 家教の 陳笠

松茂

雪も 雪の 山もの

雲下

うんて ひか 歩行 猶 廿

柳枝

明寺にて仏不二聞
戸樞をゝん寄ふ猫の喫鼠　野雲
婦らもちやくゝ蛙の目もとまり　五風
ゝ陰りてまゝ家の門雀　鶯風
竹もりの経冊さらへ氏泥袋　和言
月かゝれしゝ屋花の下陰　後仙
長家なる豆腐の出来さうな　巴梁
畑打もうれこちゝ向かう　凍雲

十九
近江路遠入る遠ふ山乃秋　吳人
竹もり寺ふくのうけ　之言
清く流ゝ家の陰ふ鮫うゝて　初十
お目ゝ歯ふゝ竹の陰居松　風字
清蛙ふかゝ長ゝと知ゝ奉公さ　夕爺
幽ゝ夢下ふ遠ゝ言渡　東波
竹ふれとふに開ふゝ手ゝ　茅中
至腐の山れふゝ玉月明　選考

拾遺集に云世常に痩たる
にてもあるかの仙母も目に多
和泉式部
稚なかく直かさけの中に花
有蒙
法花のお経の巻の中に
和泉
吸ふて吹ぬる笛の天に
如風
小夜ふけてさるくつかう
相模
ナイウ
ちもせてちるくと何ゝ又
素覆
世ゝ一四里に寄る鳥舟
笑雄

笑人に見せて涙ぬる
袋表法ゝ所てふ事を
一川
雲にふれて人の泊て雲の
春風
雪ふの中に
東水
南の事に出る花ゝの顔
風切
教に立て千年乃春
紙子

四季混雑

紙雛戸伺ふんせても　懐子　凡切

物語戸番ニ一ツふきまれて　歌舞

番くらべ菱ちかるお撫れ　小巴

夏ふか牛のてふ川ふる　雲車

ちるもの〳〵ふくて先ハ　素桐

地獄ふ寄ひかゝも法ハ着うれ　武川

三月ふ寄ふ咲ぬ〳〵ゝを　蔵月

三月ふ咲ていたり〳〵の梅　湖全

三稲ふ戸菱ちとりかゝ　京子

神前戸うゝや命の手ひ子　香北

三月桜戸市のかゝも咲ちゝ　芝二

三稲ふ戸菱ちかゝもこれ先人　句水

三月ふんゝ咲稲のそ〳〵ハ凡のも　竹尾

ふるかゝりもゝ多毎ニ五月雨　雪言

、花もさかりなる一さくら　多かく　院尊

、雑秋部　池塘に散かゝるのこり　柳子

夢さかり過て　さえ〳〵　さ雪　梅花

野も山もまてとかゝしの月　菜笠

一夜ちの仕度てきあり　屋山　芳角

、いかの名かちを伝へ　海る　厂　敦市

高の高ふ野とこそ　大根川　柳子

、野山ても山ても　高ふ　松吉

、名月の海の面　抵尹

清川にうつる月　雲る

摘かゝる　池かれて　古屋　柳花

雪ふかつて　つゝのこさ　一つ　釈　仙路

、入おもそかの　みさ高　仝　鶴星

、うれてもれかと　水鉢　角白

、ゝゝ清角　皆　家　かして　屋　雪川

ゝゝ蓋ひらけて浮世さらばの田かへす春　多麻
ゝゝ世の中の物かつぎしら髪ある　世春
ゝ浮世かへりんのもちする蓑笠小　蛙青
ゝゝ寝ぐれわらを寝るかぶりのり　肆延
ゝ花もうるかぶる嶋の蓑笠春　芝仙
ゝ人ゝ蓑ゝ蓑もなさし物の蓑　青字
ゝゝ鶴鳥や蓑をうれ春かな　山甲
ゝ佛しこの山ゝ生ん事をかしうれ　野夕

うりくとめ先くも蓑笠うれ　一童
ゝ花かつぶれ蓑と傳の水桶の帥　廿　拾京
生ゝれてかつゝもいり山細花　今　文工
ゝ蛙花や墨ゝ行ゝ行ゝ水ゝ　文校
先ゝゝ行ゝ弱人ゝ乙ゝ蓑見ゝ　桂物
ゝ蓑物やさても蓑特小一二帥　雨菓

踊見や赤かつかつも親古詩　仙仙

名にたてる[illegible]の[illegible]　玄旨
初瀬の詣るを[illegible]山田[illegible]　古歌
[illegible]の[illegible]の[illegible]　源氏
[illegible]山[illegible]　[illegible]　[illegible]
又[illegible]の山寺[illegible]　[illegible]　山中
横平の道を[illegible]　[illegible]　松葉
[illegible]の[illegible]　[illegible]　市桃
[illegible]の[illegible]　[illegible]　[illegible]

雪解や[illegible]　其道
[illegible]　☆梅枝
[illegible]　全　[illegible]
[illegible]の[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　行杜
[illegible]　[illegible]　松下
[illegible]　[illegible]　泥氏
[illegible]　[illegible]　野雲

時雨やうち向ふる窓ひとり　依舟　五月

咲ることくふかき行や　萩の家　鶯見

夕泉やうちみもこんこのうち　和言

夜明やれの江水の近ちかみ　後仙

一筋も月かくれの柳ちる　巴梁

初雪やうつるもあるふかしみ　涼袁

素湯出やうつるも水仙黄　吳人

村雨やうとあれ家とあれ家　凡字

清さをとまんとこんわうんを四うあ　依舟

宝蓮やうふかき雲ちみをうをあかう　桂里

かあんくも麻をメてとあし　和の麻　和永

月見世やうくもあんて法をうく　如凡

初了やう麻をれとあ年へ物ひもの　探芝

行秋を舟りてけうう栗山ふるあ　を法

焼き牛ぬるあ赤ふ法山屋くをうあ　和湖

山川の四五ぬるうあ年ぬ　多葉

凌霄や見えそうでなほのるらん　秀紀

耳かきくれのさきちや丁の夢　宣秀

学の夢や陸奥のるもしらぬ　保山

うら道へ迷ひいてゝる清れるか　紅々

白雲や苔の糸のかけか一二條　五湖

犬の毒て字耳さやう屋敷ハ　素行

苔のこふ木ゝこんをて蓑うか　鳥雛

五ゝれを上ふかちり生蟬うか　利良

角風か縮れらして裏もたん　東坡

庵下もれかひゝこちやうん鶯　茅舎

苔ちるもちと苔くおりぬ袷うか　祇田

笑えをんよとゝろちや赤の赤　高月

笑法か結系かいれて大根畑　紅邑

経形や青ゝちしもいけちち　東雲

ちちんゝ繕かをゝや　笹鶯　東山

系うてれよりちのこゝ　茅月　素月

笑ふる合点てあるきとうあ　桃里
あるかりもしてわるや冬の月　一門
ちるさまるうてんて祖父の掛物に　蓬
うれはうとおちるを見て月蓬来に　雨十
蓬の宿やれのさきひかりさ　之言
之為ゆ中か見てんやサ帝忠　洗利
枝川て耳かあくきむ蓬来うん　冬春
炉ひらきや　稽かうえき（来て蓬）　川林　蓬冬

雪も又ひらあ毛て初まうん　京　楚蓬
宝蓬や綿けもきを炉先てかう　播磨　南蛇
入物宝の蓬や御て名詠の花　鍛林　冬蓬
牛のあや悔多れかもう富中　凡牛
ちのいうを手ちかいやあを　和山
白雨や和之の白かあうかう　十歩
美の戸もうくゆ蓬門や花ちかう　土音市　東九
出仏うや年うくかあうあかあう　里冬

山もちらしたりて嘱するしるべ　柳亦

あかつきの山ぢ分けしやうの人　柱月

紅の梵くゆるやうにもてなくふる　雪人

ぬしなの角なりけりておほろ月　夕雨

自今七月並の支令なる者の如き序を

そむるうちに書くみたる儀は小評をなすこと

定むるの通り一社の設の紙の文字くるる場を

令延の賀書とあり　て神のよりとなりたるとの

こと

一蕉門の俳士に平生に二條の法をもち令序うは

五條の式を初ゆ乃きうち

一蕉を先として情を論せさるもう詩歌也歌に對て

白

十五

俳諧の一門を建立し、其を為さう

一発句脇第三四句目より平句の式百句の中も

ちゃくゝ取ふり句新を為さう

一発句も付合も新句の式にて句作の後有る事を

為る為さう

一出来地の式ふを為て地の流行を為る事

一法式を百韻をもつて定て法を定ふ法式の

道理を五十韻に下ち古今の用捨なるべし

但歌仙行八素の内先小月にして二表二月を

用ひ長歌行八四十八句にして表の月花を

五十韻のごとし

一発句の切字は脇の新字なり第三の下句も

月花の字並もよし字の元禄の発句八と

俗の四人俗のごとあり二理百韻の理を為ほ怪ふ

名用を捜出さう百ふ百ふ為さうし

一手水法の大事なつゝを連歌俳諧の用のことおも

為ゝ長元和ふ人を気のを級ふの

[illegible]人の飯かくるん弟の者ん[illegible]ふきて今[illegible]の[illegible]ふきに
いて他階[illegible]付[illegible]弟段ふる絃んの新付ハよりや
他階[illegible]ふる云階に他[illegible]の法[illegible]ふつきよりし

一付言ふむり付[illegible]ん[illegible]て系句を業[illegible]
中位の変化[illegible]ハ五句の[illegible]の[illegible]
物[illegible]句をとるん[illegible]は系句を耳[illegible]
[illegible]

為年拍子
新句ハ系句の写をもるん五て系句の分の浮を見て
句他ハ系句の耳をもるん別紙て系句の間の情を結ぶ

五と

一付言ハ長句より揚句まて引ん繋ニ入れて句
百変ん[illegible]ん[illegible]の法式句[illegible]
[illegible]と[illegible]と[illegible]く附くを[illegible]
[illegible]の[illegible]ん[illegible]ハ新ハ
変化[illegible]も人[illegible]に一世の変化[illegible]も長[illegible]

白

ゑりを切とかるれるさまこと一昌のうの
ゐるをあるいてらふのきのふみ仏さまさまハ
ゆるるる日時を友うしー造化かたちのうひし
凡負ゑのをあるうをとるをまさんやさまれハ
一生の貴ものとれ和合嬉時分のことを無句
ゆるる変化の工夫のほ掬を尚して秀逸の
うるをいるをきうし
一昌門ハ祖為芭師ゆの紙をうしてゆをの法

圍をの指もをくて法式論の紙あかるる十を
拭十をの大造あるをを凡古の機嫌ををうる
動をの用をあるてきうし
九し除くハをを良栗三八の数をこのハやー切花の
人のあるをいるををうしー碗の茶湯あまる
世界の茶の養意小をあるあるをや

月花

白山下
秋事

和清七ゑ

惟ふ十年の蘇ちらく
糸一筋の柔よりも
花ゝ連ゑの笑ひ
言ふ杖ひく道の八重

玄武坊

蕉門書林　皇都寺町通二條
橋屋治兵衛梓